

# 校友時報

平成27年9月30日  
編集人兼発行人  
秋田県能代市学城通2番1号  
秋田県立能代高等学校新聞部  
印刷所 朝日新聞印刷局  
写真提供 佐藤写真館

### 創立90周年キャッチフレーズ

九十の歴史が  
息づく松陵の風  
—我らの至誠よ未来へ届け—



9月6日 午前0時 校門前のスタート地点に立つ男子生徒 ~緊張と興奮~ (関連4面)

### 説「至誠力行」の実践

九十年の歴史を刻んできた能代高校の校訓は「至誠力行」。この校訓は昭和五年に制定されている。当時、初代武蔵健三郎校長先生はこのようにおっしゃっている。「至誠にして動かさざるはなく鬼神をも感動せしむるは至誠である。無限の教訓を自ら求めて力行せられればそれでよい」と。つまり至誠(まごころ)を持って行動し、自ら主体的に努力し学び求めればそれこそが至誠として、ここにあらわれない、自由闊達で寛容な教えであり、実行を

もって示せという生徒の自主性を信頼することはできないだろうか。  
現在の能代高校では九割の生徒が進学を希望している。大学へ入学し、さらに自ら学びたい学習を突き詰める。毎日コツコツ積み重ねる努力の必要性は九十年変わっていない。もちろん、時代の流れの中で学びの分野や求められる能力は変わってきただろう。最近では、科学分野の発展が著しく、大学の研究も非常にハ

イレベルである。そのため論理的な思考力や創造力に加工し、常識や定説を疑ってみることも必要とされている。課題に向かう基礎力として今の高校の学力は不可欠であり、大学入試でその力が問われるのだ。  
しかし、現在の能高生は学習に対する意欲が必ずしも高いとは言えないのではないかと。小紙、校友時報のバックナンバーを見ても「英語、数学に力を注ぐ」「目的ある

進路決定」などの見出しが見られ、生徒は自ら学びを求めているように見えます。たことが分かる。今の能高生は課題など先生から出されたものをやるだけで、学びの姿勢が受け身である「やらされている感」から脱出し、自ら、勉強はつまらない、ままではないか。  
校歌には「学びの道を究めよ」という歌詞もあり、能代高校生にとって「学び」とは本分であるといえるだろう。創立百周年に向け、原点に立ち戻り、自ら学び、行動することが能代高校生

## 創立九十周年 新たななる挑戦へ

### 記念講演 池上 彰氏が来校

演題「学び続ける力」

十月三日(土)午後一時より本校第一体育館で能代高等学校創立九十周年記念式典が挙行政される。来賓、受賞者の方々参加のもと同窓会、同級生約六百名の出席が予定されている。式典に引き続き、記念講演会も催され、池上彰氏を迎え、フリージャーナリストとして、幅広く活躍され、よくわかるニュース解説で大変人気が高く、念願叶って来校していただける運びとなった。  
本校では、これまで各分野のトップレベルで活躍されている方々をお招きし、進路講演会を実施してきた。

平成二十三年には、元巨人車の桑田真澄氏を講師に迎え、能代市文化会館で講話していた。その後も、成長期にある高校生の人生観を感化し、自己の将来や進路選択をより充実したものにしていくことを目的に、進路講演会を本校のウィルプロジェクトの一環として、大々的に行っている。  
平成二十三年 桑田 真澄氏  
平成二十四年 茂木健二郎氏  
平成二十五年 辻 秀二氏  
平成二十六年 竹中 平蔵氏

一流の方々との接触や思想に触れる機は恵まれ、生徒、保護者一同、創立九十周年の講演会を楽しみに当日を迎えようとしている。

私達が住んでいる秋田県の小中学生は全国トップレベルと言われている。確かに毎年行われる全国学力状況調査(〇一五年実施)では、小学校、中学校とも四十七都道府県中、三教科の平均点が最も高い(国立教育政策研究所日下P1)などの実績を残している。このことから秋田県の子供たちの学力は優れていると捉えられている。

一方で、二〇一三年の大学入試への現役進学率は四十七都道府県中三十四位、二〇一四年は三十七位、二〇一四年は三十八位(旺文社教育センターHPより)となっている。優秀な生徒が進学しない場合も無いとは言えないが、小中の義務教育を終えたあとの高校でのその後の学びの伸長についての見方は厳しい。

能高生は定期考査に向けた勉強について、確かに一生懸命取り組んでいるが、その先への意識が希薄である。期間限定、範囲限定の知識ではなく、もっと広い。大学入試のための知識でなく、勉強そのものに価値を見出すようになれないのではないか。

私たちは、決して公式に数字をよめる様なパターン化された問題を解くための力だけを磨くのではなく、長い時間をかけて学習することによって視野の広さを獲得しようとしているのだ。

何のために学ぶか。「一人ひとりについつい」  
「流石の間に」  
「能高生の一伸び」  
代は、まだまだある。(池上)



写真提供：野球部父母の会

# 全国大会準優勝の軌跡

第六十回全国高校軟式野球選手権大会が八月二十二日から二十六日に兵庫県明石市の明石トイカド球場と高砂市野球場で行われた。本校野球部は五年ぶりに決勝進出し、準優勝という輝かしい戦績を残した。

1回戦	津久見	2-1
2回戦	崇徳	2-0
準決勝	上田西	3-1
決勝	作新学院	0-3

**◆硬式野球部との関係はいいですか。**  
大ケラウンドが誇りですが、常に意識して練習しています。いつもよい刺激を受けています。



主将 秋元 大輝

**◆ではお互いにいい面を教えてください。**  
秋 大山は周囲を見れば自分の広さが抜けてグラウンドを見渡し、チーム全体の動きを把握しています。

**◆野球を通してどんな点で成長したと思いますか。**  
大 プレッシャーと同期待を背負うことになりました。それをプラスに変えたいことを学びました。二年連続全国大会出場を果たし、大きなプレッシャーの中で押しつぶされずに練習してこられた自分自身、日々の練習が磨かれています。

**◆全国準優勝したことで県庁、市役所への表敬訪問など多忙ですね。**  
大 高校で、このチームメンバーに出会い監督に出会えたことに感謝しています。県庁、市役所、学校、地域をあげて盛りあげてください。すばらしい環境の中で野球ができたことに心から感謝しています。

**◆放送部も後押し、軟式野球部の知名度UP**

放送部は、軟式野球部を攻めの野球をしていくという方針がはっきりとわかってきた。設備が整っていないというハンデをプラスに転じていく。発想と地道な練習をするひたむきさに感動した。またチームが仲がよ、勝ちたいという気持ちと共有し、切磋琢磨する姿に感銘した。取材にも力が入った。作品は、能高祭の文化発表でも上映され、面白かった。「知らなかったことが多かった。一等の感想をもった。練習をカメラで撮影し、雪によるハンデに注



青春時代に思いを馳せる校長先生

**校長先生へインタビュー**  
未来を担う君達へ  
自分を自らで鍛えること

野性的な高校生  
新校舎一期生であった菊池一三校長先生に当時の校風や、懐かしい思い出についてインタビューした。

▼当時(昭和四十八年四月)五十一三年三月に学部の校風について  
能代高校という皆勤強まじめで、しつかり者が多いというイメージを持つ人が多いだろうが、当時の能代高校生はとても活発で、少し危険を伴うような事にも自らチャレンジする野性的な一面が見られる生徒が多かった。また、今の能代高校生よりもさらに元気がよく、勉強に関しても先生方に挑戦していく生徒までいた。たとえばわざと先生の問題を質問し、解法を求めたこともあった。

▼女子の存在  
当時のクラスはA組からG組まであったが、生徒数のほとんどが男子生徒で、女子生徒はA、C、G組に各八名ほどいた。人数が少なく、男子生徒の容姿面に対する校則は厳格で、スカート丈も自由、緩いワイシャツも特に指定はなく、色も何でもよかった。

▼好きな言葉は  
「己の欲せざるごと、人に施すことなかれ」何事にも率先して自分からやろう。人が嫌がることでも自分から進んでやろうという姿勢が大切だ。この本は働くことの大切さや技術、組織の素晴らしさを深く味わえる名作だ。一高生校生のある方には是非読んで見て欲しい」と熱く語ってくださった。

▼百周年を意義  
今の学習や部活動の成果を維持し、さらに加速させ、土台のしっかりとした能代高校として百周年を迎えたい。九十周年はゴールではなく、百周年へ向けてのスタートである。一人一人の目標に向かって、互いに切磋琢磨して努力して欲しい。

▼女子の存在  
当時のクラスはA組からG組まであったが、生徒数のほとんどが男子生徒で、女子生徒はA、C、G組に各八名ほどいた。人数が少なく、男子生徒の容姿面に対する校則は厳格で、スカート丈も自由、緩いワイシャツも特に指定はなく、色も何でもよかった。

▼好きな言葉は  
「己の欲せざるごと、人に施すことなかれ」何事にも率先して自分からやろう。人が嫌がることでも自分から進んでやろうという姿勢が大切だ。この本は働くことの大切さや技術、組織の素晴らしさを深く味わえる名作だ。一高生校生のある方には是非読んで見て欲しい」と熱く語ってくださった。

▼百周年を意義  
今の学習や部活動の成果を維持し、さらに加速させ、土台のしっかりとした能代高校として百周年を迎えたい。九十周年はゴールではなく、百周年へ向けてのスタートである。一人一人の目標に向かって、互いに切磋琢磨して努力して欲しい。

▼百周年を意義  
今の学習や部活動の成果を維持し、さらに加速させ、土台のしっかりとした能代高校として百周年を迎えたい。九十周年はゴールではなく、百周年へ向けてのスタートである。一人一人の目標に向かって、互いに切磋琢磨して努力して欲しい。

**創立90周年招待野球 6月19日**  
**勝利ならずも善戦 全国強豪チーム招く**  
vs 作新学院・羽黒 / vs 日大山形・青森山田



その後、硬式野球部新チームは東北大会出場を決めた

硬式		(能代球場)									
能代	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4	
日大山形	0	0	0	0	5	1	0	0	x	6	
軟式		(ことおかスカルパ野球場)									
作新学院	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
能代	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	

六月十九日に創立九十周年を記念して、硬式野球は能代球場、軟式野球は三町町のとよかスカルパ野球場で行われ、全校生徒が両球場に分かれて声援を送った。硬式は青森県の高くからの強豪である青森山田と、春夏の甲子園に何度も出場している日大山形を招待し、計三校でリーグ戦を展開した。六月にもかわらず炎天下の中、生徒たちが大きな声援を送る。その後、硬式野球部新チームは東北大会出場を決めた。

軟式は全国選手権大会で多くの優勝を誇る作新学院と、東北の強豪である羽黒を迎え、リーグ戦を実施した。結果は作新学院戦は1-1、羽黒戦は3-4と勝利とはならなかったが奮戦し、健闘をたたえる拍手が球場中に響いた。今春監督監督は「全国トップクラスのチームと引きつり、または驚かすまで良かった。九十周年の招待試合の経験を活かして、昨年に引き続き最低全国ベスト8、全国出場。そしてそれ以上の結果を残したい」と話していた。

軟式は全国選手権大会で多くの優勝を誇る作新学院と、東北の強豪である羽黒を迎え、リーグ戦を実施した。結果は作新学院戦は1-1、羽黒戦は3-4と勝利とはならなかったが奮戦し、健闘をたたえる拍手が球場中に響いた。今春監督監督は「全国トップクラスのチームと引きつり、または驚かすまで良かった。九十周年の招待試合の経験を活かして、昨年に引き続き最低全国ベスト8、全国出場。そしてそれ以上の結果を残したい」と話していた。

軟式は全国選手権大会で多くの優勝を誇る作新学院と、東北の強豪である羽黒を迎え、リーグ戦を実施した。結果は作新学院戦は1-1、羽黒戦は3-4と勝利とはならなかったが奮戦し、健闘をたたえる拍手が球場中に響いた。今春監督監督は「全国トップクラスのチームと引きつり、または驚かすまで良かった。九十周年の招待試合の経験を活かして、昨年に引き続き最低全国ベスト8、全国出場。そしてそれ以上の結果を残したい」と話していた。

# 90周年キャッチフレーズは我らの志

## 全校生徒の思いをひとつに

### 九十の歴史が息づく松陵の風

～我らの至誠よ 未来へ届け～



正門前にキャッチコピーと栄光の記録の看板

昨年度九十周年記念キャッチフレーズを募集したところ、全校から三百五十六通の応募があった。

その作品の中から、生徒会執行部と先生方が検討し、複数の生徒の文言を組み合わせて「九十の歴史が息づく松陵の風、我らの至誠よ 未来へ届け」に決定した。

校訓である「至誠力行」、校歌にある「風へ松陵我が健児から」至誠「松陵」をいたさき、九十の歴史と伝統の中で、この節目に出会った私たちの志を謳うキャッチコピーとなった。

この文言は特定の誰かの考案によるものではなく、現三年生を中心とした能高生の決意を表明するものとなった。

校舎正面には看板が掲げられ、毎朝登校時に仰ぎみている。



主将 大山大晃

が、全国屈指の強豪相手に粘り強く戦い、接戦を制して決勝戦まで駒を進めた。

そこで、本校軟式野球部の二人の主将の大山大晃さんと秋元大輝さんに話を聞いた。

◆本校には、硬式野球部と軟式野球部の二つがありますが軟式を選んだ理由は、

大 能高軟式野球部は私が中一の時に全国優勝を果たしており、強い憧れをもっていました。全国を意識して野球ができ、自分たちのがんばりで全国大会へ出場できるチームではないかと、県内で優勝できれば、全国でも上位にけると思っただけです。

秋 勉強も野球を両立したいと考えていました。監督の方針が短時間の練習で勉強もやれる環境をつくることで、これについていこうと思っただけです。

# 軟式野球部 二人の主将 すべての人に

◆二人主将の姿勢は、珍しいと思えますが、実際やりにくさはないですか。

秋 昨年度の全国優勝以来、二人主将制になったと聞いています。特に不都合は全くありません。互いの役割が、いいバランスでできていると思います。

り、同志です。切磋琢磨できる関係といえます。

また、同じチームには直接言えない悩みなど、硬式主将に相談したこともありました。

秋 硬式より練習時間は短いので、その分集中して練習に取り組みようと思っただけです。行動面ではかなり硬式野球部を意識して練習しました。例えば、練習の始まりの時間とか、集合は硬式よりも早くを意識しました。

## 九十周年に花を添える

### 二年連続十六回目 全国大会出場を果たす

野の広さから、チームに指示を出すので、絶対的な信頼があります。試合の反省やミスの原因などもよく指摘してくれます。

大 秋元はまず、「声でひびく」主将。自分とは対照的な性格で、人前で々と自分の考えを理路整って話すことができ、グラウンドでの声もよく響きます。「自分はシャイだから」と練習中にチームの雰囲気が悪くなるのを防ぐために、「果敢」をかけるように練習しています。

秋 監督はどんな存在ですか。

大 遠征の際には一緒に風呂に入りました。色んな人に津田さんを見て、この大会で、県立高校で全国大会に出場した高校は市立高校を含め、二校ほどしかありません。硬式でも軟式でも、地元で活躍している選手もいます。能高高校の文武両道を果たせたと思います。

秋 今年、九十周年招待野球には、ソフトボールと硬式・軟式ともに野球部を応援し続けてきた応援団へ、全国大会へも吹奏楽部とともにかけつけました。

団長の佐藤翔里さんは、「秋田大会から応援してきました」といいます。

他校の応援も参考になる。東北大会で盛岡第一高校の傍姿に届いた、昔ながらの応援が印象に残っている。

が、なんといっても、明石の決勝戦後、大会関係者の方から「能高高校の応援が一番よかった」と褒めていただいたことが嬉しかったと誇りに語ってくれた。

## 能代高校の足跡 探訪「青春の碑」

本校が今の高岡の地に移転したのは昭和四十九年、それ以前は、現能代市文化会館のある柳子山にあった。校舎移転は大事業であり、十月二十九日には中相通りから高岡の新校舎までパレードが行われたことが六十周年記念誌に記されている。

旧校舎跡地には、「青春」の石碑が建立され、往時を追想するシンボルとなっている。大きな石に刻まれた「青春」の文字は、旧制能代中十五周年記念誌に記された。昭和五十七年九月に開校、昭和五十九年に開校、左の大きな松が旧校舎跡地をみよ。

## 憧れの「自在の像」 原稿募集

能代高校のシンボル像として校前に建てた「自在の像」。これは、昭和五十年十月一日の除幕式、十九期生小林繁の寄贈、二十九期生戸松恭一さんの制作によるものである。

写真は今年の能高祭の時のもの。この日は、卒業生、保護者の方々をはじめ、赤い鳥を飾り、お待ちしています。新聞部まで。

この「自在の像」は男子生徒の憧れを誘うのだろうか。卒業式後の記念撮影スポットとしても人気がある。

新聞部では、この「自在の像」にまつわるエピソードを募集している。在校生はもちろん、卒業生、保護者の方々ぜひ、お寄せください。お待ちしています。新聞部まで。

## 能高生徒会室 受け継がれし自治精神

生徒会役員選挙が九月十六日に行われ、二年F組の本間将也さんが新生徒会長として就任された。

菊池一三三校長が、旧生徒会室の表札を、新生徒会室に手渡してくださいました。

旧柳子山校舎では、生徒会室は独立した建物で、離れに

なっていた。校舎移転が完了した十一月、生徒会長だった先生が旧校舎に行き、そのまゝ表札が残っており、大事なものとして自宅に持ち帰ったのだそう。

その表札には「能高生徒会室」と書かれている。四十以上の歳月を経て、大先輩である元生徒会長から、新生徒会長に託された。

今後、三階の生徒会室の前に掲げる。往時を想わせる貴重な品。新生徒会長の胸にその使命もずしりと重く伝えられたに違いない。

## 明石での応援を誇りに

一人ひとりに渡したそう、夕強化という課題に徹底した。

今年、九十周年招待野球には、ソフトボールと硬式・軟式ともに野球部を応援し続けてきた応援団へ、全国大会へも吹奏楽部とともにかけつけました。

団長の佐藤翔里さんは、「秋田大会から応援してきました」といいます。

他校の応援も参考になる。東北大会で盛岡第一高校の傍姿に届いた、昔ながらの応援が印象に残っている。

が、なんといっても、明石の決勝戦後、大会関係者の方から「能高高校の応援が一番よかった」と褒めていただいたことが嬉しかったと誇りに語ってくれた。

